

三井のリフォーム 住生活研究所 所長 西田 恭子

NHK朝ドラを見ていて……

朝のNHK連続テレビ小説(朝ドラ)を楽しみにしている方は多いと思う。

今は「花子とアン」が放映されている。朝八時から見られるのは家にいる奥様だけだと思っっている方もいるが、朝七時半からのBS放送を出勤のぎりぎりの時間まで見ている方も増え、土曜日の午前中にまとめて一週間分をご覧になる方も多いと聞く。

私も朝の忙しい中、横目で「花子とアン」を見ている。その中で主人公「はな」の腹心の友として出てくる筑豊の石炭王と結婚した「蓮子様」に、関心が集まっているようだ。私も気になっていったのだが、放映が進むうちに蓮子様のモデルは、三井不動産の創立六十年記念出版『家の記憶』に載っていた「柳原燐子(白蓮)」ではないかと気がついた。

この本の著者は、建築史家で有名な藤森照信氏と建築写真家の増田彰久氏で、第一巻(明治篇)の第六巻(昭和篇)まで、日本の洋館・和館が素晴らしい描写と写真で集大成されている。記念出版なので非売品

なのだが、三井不動産の方から頂くことができ、私の大切な本の一冊になった。

この本と朝ドラが私の中で繋がったのは、本の中で紹介されている福岡県飯塚市の「旧伊藤伝右衛門邸」が、珍しく色恋沙汰を取り上げながら、建物の解説がされていたからだ。

本には、「筑豊の石炭王伊藤伝右衛門と筑紫の女王柳原白蓮の名譽と恋を賭けた対決」と記載されていて、建物をテーマに読んでいたはずが、思わず別の関心で文章を追ってしまっていた。読み書きもままならない炭鉱王に嫁いで暮らしたが、その夫に公開離縁状を出し、東京帝国大学卒の若い学士と駆け落ちした不倫の妻、「恋に生きる女」、女性解放の先駆者“と言われた歌人の白蓮が過ぎた筑豊の家はどんなものだったのだろうか。

本の全文をそのまま転載できないのが残念だが、幼いころから山に入り石炭を掘っていた伝右衛門が石炭王として立志伝中の人となり、立派な自宅を明治三〇年ごろに建てている。

その後、公家出の華族柳

原伯爵家の娘・燐子と再婚するにあたり、平屋部分に京都風の二階部分を増築した。一階が伝右衛門、二階が燐子の居室でそこからは素晴らしい日本庭園が一望できる。夫婦別寝室なのだろうか(?)。平屋部分が一〇〇坪程ある家にとつて夫婦はそれぞれの居室を持っているのは当たり前だったのだろう。なんとも羨ましい限りだが、それだけではなく食堂は洋風化され、ハッチにはチョウやタンポポを使った図柄が華やかに描かれ、燐子のためという思いが感じられる。

だが、新しい門出を祝して改装された家での結婚生活は一〇年で幕を下ろす。建物の果たす役割は、どこまでであったのかは分からない。伝右衛門と燐子との二五歳もの年の差婚もなかなか想像はできないのだが、写真で見える応接間の暖炉のオール・ヌーヴォースタイルは美しく、今でも旧伊藤伝右衛門邸は文化遺産として保存されている。

福岡インターから四五分。本の中のこの章を読んだ時から、いつかは訪れたい場所だと思っていた。



西田恭子氏のプロフィール「一級建築士。「三井のリフォーム」で設計を手かけ二五年。暮らしの創造に貢献する「三井のリフォーム 住生活研究所」の所長に就任。新聞・雑誌・書籍の執筆、各種セミナーで講演を行う。日本女子大学非常勤講師。日本建築家協会正会員。」